

陸連時報 三

2015
平成27年

2 月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

2015年度主要競技会日程(案).....	230
年頭にあたって(会長 横川浩).....	231
強化関連情報(強化委員会).....	232
2015年シーズンに向けて(強化副委員長 麻場一徳・酒井勝充・山崎一彦・植田恭史) 全国強化責任者会議・全国普及育成担当国会議報告(強化委員会より)	
2014年度競技運営委員会研修会報告・JTO研修会~知識豊かなJTOを目指して~ (競技運営委員会).....	235
2014年度全国普及育成担当国会議報告(事務局).....	236
“日清食品カップ”第17回全国小学生クロスカントリーリレー研修大会報告 (普及育成委員会 井筒紫乃).....	237
国際陸上競技連盟(IAAF)カOUNシル会議報告(国際委員長 田中克之).....	238
日本陸連アスレティック・アワード2014報告(事務局).....	240
日本陸連栄養士の発足について(医事委員会委員 田口素子).....	242
大会観戦ガイド.....	243
陸協NEWS.....	244
事務局からのお知らせ.....	246

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

2015年度主要競技会日程(案)

※主要競技会日程は、2015年3月の理事会で最終承認されます。

	主催競技会			後援競技会・協力団体主要競技会			国際競技会		
	期日	競技会名	場所	期日	競技会名	場所	期日	競技会名	場所
4月	19(日)	99 日本選手権50km競歩	石川	4(土)	★ 24 金栗記念選抜中・長距離	県民総合(熊本)			
	19(日)	17 長野マラソン	長野	11(土)~12(日)	★ 69 出雲陸上	浜山(高根)			
				18(土)~19(日)	★ GP① 織田記念陸上	広域公園(広島)			
				25(土)~26(日)	★ GP② 日本選抜陸上和歌山	紀三井寺(和歌山)			
				25(土)~26(日)	★ GP③ 兵庫リレーカーニバル	ユニバー記念(兵庫)			
5月	10(日)	ゴールデングランプリ	等々力(神奈川)	3(日)	★ GP④ 静岡国際陸上	エコパ(静岡)	2(土)~3(日)	ワールドリレーズ	ナッソー(バハマ)
				9(土)	★ 26 ゴールデンゲームズinのべおか	延岡(宮崎)	8(金)~11(月)	1 アジアユース陸上競技選手権	ドーハ(カタール)
				10(日)	★ 25 仙台国際ハーフマラソン	宮城			
				17(日)	★ 5 ぎふ清流ハーフマラソン	岐阜			
6月	26(金)~28(日)	99 日本陸上競技選手権	各地	12(金)~14(日)	○ 15 日本学生個人	平塚(神奈川)	3(水)~7(日)	21 アジア陸上競技選手権	武漢(中国)
				28(日)	★ 30 サロマ湖100kmウルトラマラソン	北海道			
7月	4(土)~5(日)	99 日本陸上競技選手権混成	長野市営(長野)				3(金)~14(火) 全体会期	28 ユニバーシアード	光州(韓国)
	4(土)~5(日)	31 日本ジュニア選手権混成	長野市営(長野)				5(日)	アジアグランプリ①	パトゥムターニー(タイ)
	12(日)	2 日中韓3カ国交流陸上	厚別(北海道)	12(日)	★ 28 南部記念陸上	厚別(北海道)	8(水)	アジアグランプリ②	アユタヤ(タイ)
	29(水)~8(2日)	68 全国高校陸上	紀三井寺(和歌山)	25(土)	★ 55 実業団・学生対抗	平塚(神奈川)	12(日)	アジアグランプリ③	バンコク(タイ)
8月	13(木)~15(土)	50 全国定通制高校陸上	駒沢(東京)	2(日)	★ 40 蔵王坊平クロスカントリー	上山(山形)	5(水)~16(日)	21 世界マスターズ選手権	リヨン(フランス)
	18(火)~21(金)	42 全国中学陸上	厚別(北海道)				22(土)~30(日)	15 世界陸上競技選手権	北京(中国)
	22(土)	31 全国小学生陸上	日産スタジアム(神奈川)				23(日)~29(土)	23 日・韓・中ジュニア交流競技会	済州(韓国)
	29(土)~30(日)	3 全国高校陸上選抜	ヤンマーフィールド長居(大阪)	30(日)	★ 15 北海道マラソン	北海道			
	29(土)~30(日)	50 全国高専陸上	博多の森(福岡)						
9月				11(金)~13(日)	○ 84 日本学生対抗	長居(大阪)			
				25(金)~27(日)	★ 63 全日本実業団	長良川(岐阜)			IAU100km世界選手権
10月	2(金)~6(火)	70 国民体育大会	紀三井寺(和歌山)	12(祝・月)	○ 27 出雲全日本大学選抜駅伝	高根			
	16(金)~18(日)	31 日本ジュニア選手権	瑞穂(愛知)						
	16(金)~18(日)	9 日本ユース選手権	瑞穂(愛知)						
	23(金)~25(日)	99 日本選手権リレー	日産スタジアム(神奈川)	25(日)	○ 33 全日本大学女子駅伝	宮城			
11月	23(金)~25(日)	46 ジュニアオリンピック	日産スタジアム(神奈川)	30(金)~11/1(日)	36 全日本マスターズ	長良川(岐阜)			
	15(日)	国際女子マラソン(仮称)	埼玉(予定)	1(日)	○ 47 全日本大学駅伝	愛知・三重			
12月	23(祝・月)	15 国際千葉駅伝	千葉						
	6(日)	69 福岡国際マラソン	福岡						
	13(日)	18 小学生クロスカントリーリレー	万博記念公園(大阪)	13(日)	35 全日本実業団女子駅伝	宮城			
	13(日)	23 全国中学駅伝	山口						
2016年1月	20(日)	66 27 全国高校駅伝	京都		○ 15 全日本大学女子選抜駅伝	静岡			
	17(日)	34 都道府県対抗女子駅伝	京都	1(祝・金)	60 全日本実業団駅伝	群馬			
	24(日)	21 都道府県対抗男子駅伝	広島						
2月	31(日)	35 大阪国際女子マラソン	大阪						
	14(日)	51 千葉国際クロスカントリー	昭和の森(千葉)	14(日)	44 実業団ハーフマラソン	山口	7	アジア室内選手権	
	21(日)	99 日本選手権男女20km競歩	兵庫				13	アジアクロスカントリー	
	27(土)	30 福岡国際クロスカントリー	海の中道海浜公園(福岡)						
3月	28(日)	16 東京マラソン	東京						
	6(日)	71 びわ湖毎日マラソン	滋賀	6(日)	○ 19 日本学生ハーフマラソン	東京			
	12(土)~13(日)	16 日本ジュニア室内大阪	大阪城ホール(大阪)				16	世界室内選手権	ボートランド(アメリカ)
	13(日)	16 名古屋ウィメンズマラソン	愛知				20(日)	16 アジア陸上競技選手権・20km競歩	能美(石川)
	20(日)	40 全日本競歩能美	石川	20(日)	○ 10 日本学生20km競歩	石川		22 世界ハーフマラソン選手権	カーディフ(イギリス)

★=後援競技会、○=協力団体主要競技会

年頭にあたって



公益財団法人 日本陸上競技連盟
会長 横川 浩

新年、明けましておめでとうございます。二〇一五年の年頭に当たりご挨拶申し上げます。

二〇二〇年、第三二回オリンピック競技大会・第一六回パラリンピック競技大会が、国際オリンピック委員会総会において、TOKYOのコールで決定してから、早や一年が過ぎました。東京オリンピック・パラリンピック開催決定は、多くの子どもたちをはじめとした日本国民が、改めてスポーツへの関心を持つきっかけになりました。昨年は、我が国スポーツ界の新たな一歩が始まった年でありました。東京オリンピックを盛り上げ、日本全国で盛り上がったスポーツへの機運を昇華させるためには、オリンピック開催国である日本選手の活躍が、何を差し置いても必要であります。本連盟は、これまで以上に競技力の向上に努めて参ります。

昨年のアジア競技大会は、日本代表選手五二名のうち三六名が初代表選出の布陣で臨み、残念ながらメダル獲得目標には届かなかつたものの、金メダル3、銀メダル12、銅メダル8を獲得しました。また、世界ジュニア陸上競技選手権大会では、金メダル1、銀メダル3、銅メダル2を獲得し、同大会史上最高の成績を収めました。ジュニア・ユース世代の強化・育成が、数年来の成果として実を結び始めており、二〇一六年リオデジャネイロオリンピックを経て、東京での活躍が期待される若い選手がトップアスリートに成長し、世代交代が進みつつあります。更に日本が世界の舞台で活躍するためには、選手のみならず指導者が国際的な経験や指導力を身に付けることが喫緊の課題と考えております。本連盟は、国際的な指導者育成に向けた、新たな施策を進めてまいります。

また昨今、子どもの体力や運動能力低下など、スポーツ離れが盛んに言われており、スポーツの基本である「走・跳・投」の陸上競技の普及や育成活動に努めてまいりますとともに、子どもたちが陸上競技に対して興味や関心を持ち、気軽に陸上競技を始めることが出来る環境を作りたいと考えております。また、子どもたちが正しくスポーツや陸上競技の基本を学べるように、指導者の育成にも取り組んで参りたいと思っております。

スポーツ界を取り巻く環境は、社会経済とも密接に関係しており、変化や進化を続けております。本連盟は、世の中の流れに対応し、陸上競技界を牽引する役割を果たしてまいります。オリンピック・パラリンピック開催の決定を契機に、様々な施策を打ち出し、それらを成し遂げてゆく組織の充実、自治体や関係団体との連携をより深め、多くの関係者とともに歩み、取り組んで参る所存です。

今一層、皆様のご理解、ご支援をお願いいたしましてご挨拶いたします。

強化関連情報

強化委員会

2015年シーズンに向けて

強化副委員長(トラック・フィールド部門統括/強化戦略担当)

麻場 一徳

リオデジャネイロオリンピックを目指して組織された強化委員会原体制も後半の2年を残すところとなった。現体制の最終目標であるリオデジャネイロオリンピックに向けてサポートをかけるべきこの11月より、副委員長、トラック・フィールド部門統括及び強化戦略担当を務めることになった。現在、身の引き締まる思いで職務に着いているところである。

周知の通り、金メダル10個を目標に掲げて臨んだ仁川アジア大会では、獲得数3個にとどまり惨敗した。中間決算ともいべきアジア大会での惨敗は、結果としては非常に大きな痛手であるが、この2年間で何をすべきかをより明確にできたという点をプラスに変えていくことで教訓を活かしていきたい。

この2年間の総括をもとにして、強化委員会では以下に挙げる大きな二つの強化方針を掲げた。

①北京世界選手権、リオデジャネイロオリンピックに向けて戦える競技者の育成と派遣

②2020年東京オリンピックに向けた選手の育成と強化

強化委員会自体としての活動の中心は①の実現となるが、それが結果として②につながることを意識しながら進めていくことが大切だと考えている。さらに、①の具体的な課題として次の5つを挙げた。

- 1) 派遣設定記録の設定とそれを用いた選考
- 2) 強化競技者制度を基にした個人強化の充実
- 3) ナショナルチームの編成と充実
- 4) 国際競技会への積極的な派遣
- 5) 医科学・情報戦略の充実と活用

1)については、この2年間の取り組みを踏襲したいと考えている。ただし、設定記録の見直し等、陸上競技という競技特性や各種目の特性にマッチした制度のあり方については模索していきたい。2)と3)についても、この2年間の踏襲である。個人の強化とチームとしての強化という両輪を上手く機能させていくことが重要だと考えている。しかしながら、この2年間、必ずしも有効に機能していない状況があった。個人の強化とチームとしての強化は相反する立場にもあるため、バランスを上手くとらえないとお互いが相殺し合う関係となってしまうかねない。その点を解決するために、シニア(各ブロック)と強化育成(U19及びU23)との連携、強化委員会と学連や実業団連合との連携を強めていく必要があると考えている。これから2年間の大きなテーマとして「連携」があると言っても過言ではないだろう。

4)、5)については、②に掲げた2020年東京オリンピックにつなげていくという意味においても、非常に重要なポイントとなる。また、これからの日本陸上競技界の進むべき道として、グローバルスタンダードで物事を進めていく体制をより強化していく上でも、必須であると考えている。

方針②においても具体的な課題を掲げているが、それについては別の機会に纏綿説明することとして、今回は方針①を詳細に述べることで2015年シーズンの抱負にかえたい。

強化副委員長(中長距離・ロード部門統括/実業団担当)

酒井 勝亮

新年明けましておめでとうございます。日頃より中長距離・ロード強化に、ご尽力ご協力いただき誠にありがとうございます。本年は、北京世界選手権・次年度のリオデジャネイロオリンピックに向けて非常に大切な年になります。高い目標を掲げて強化を推し進め、競技者・指導者が力を結集して戦える環境作りに努力してまいりたいと考えております。昨年4月に「ナショナルマラソンチーム」を立ち上げ意識改革を中心に活動を始めました。まだ大きな成果を挙げるまでに至っておりませんが、徐々にではありますが考え方が浸透し、上昇の兆しを感じております。また、中距離、長距離、競歩種目におきましてもナショナルチームの色合いを濃くし、強化育成をしていきたいと考えております。リオに向けては、海外拠点の準備に取り掛かり、本番で競技者が最高の実力を発揮できる準備もしていきます。また、日本の得意分野でもある医科学をはじめとする各種サポートを有効活用し、強化に結び付けていきます。東京オリンピックで成果を上げるために競技者の強化・育成・発掘は、最大の課題ですが、指導者の育成も欠かせません。指導者の目標が低ければ必然的に競技者の意識も低下いたしますので、JOCナショナルコーチアカデミー・海外研修事業等を活用し準備をしていきたいと考えています。

(中距離)「中距離の練習拠点確立(味の素ナショナルトレーニングセンター中心)」 「ジュニアを含めた強化競技者の再構築」などの施策を実施して強化に結び付けたい。近年、中距離競技者が長距離種目に移行していく傾向があり、競技人口の減少傾向が続いているので、スプリント能力の高い競技者を発掘し種目トランスファーも実施していきたい。また、1500mだけを専門種目として行なうのではなく、5000mも含めた中距離と長距離の垣根を越えた強化システムの構築を実施していきたい。

(長距離) 実業団、学生等の枠を取り外した強化合宿を展開し、高い目標を掲げ強化・意識改革に取り組みたい。特に女子は、まだ世界と戦えるチャンスがある。生活を賭けて走るアフリカ勢とでは、身体能力はもとより競技への意識面でも大きな差があるが、競技者が最大の力を発揮できるような種々のサポートシステムを充実させることにより、強化を推し進め関係者が力を結集して戦う準備をしていきたい。

(マラソン) ケニアを中心にした東アフリカ勢の台頭で高速化が進み、冬型マラソンのスピードに日本勢が対応できないのが現状である。しかし、出場人数に制限のあるオリンピックと世界選手権では、諦めない粘りの走りをすれば入賞につながる。ナショナルチームを中心にした強化合宿を実施して成果に結び付けていきたい。オリンピックに向けて年末から

選考会が始まるので選考の公平性を高め、多くの競技者が納得のいく選考要項を作成し、高い目標に挑戦する意識を高めていきたい。

〈競歩〉 仁川アジア大会男子50km競歩で金メダルを獲得した谷井孝行選手（自衛隊体育学校）、男子20km競歩で銀メダルを獲得した鈴木雄介選手（富士通）を始め多くの競技者が成長してきている。背景には、競技者・指導者が世界を見つめ日々練習に取り組んだ努力の賜物と考える。この勢いを止めることなく北京世界選手権・リオデジャネイロオリンピックに向けてつなげていきたい。

〈関係団体との連携〉 これまでオリンピックなどの主要な国際競技会に出場した競技者の大半は、実業団所属の競技者でありました。特に、長距離・マラソンでは、実業団が圧倒的な競技力を示してきました。しかし、その強化はそれぞれのチームで独自に進められることが多く強化のノウハウの伝授が少なかったように考えます。実業団、学生との関係者が陸連役員を兼務し、情報等の流れを迅速にする事により、実業団、学生等の枠を取り外した場（研修会・合宿）を設け、考えを直接訴えることにより、目標を一つにしてチームジャパンへの意識を高め、意識改革を図っていきたくと考えています。

強化副委員長（強化育成部長／2020東京オリンピックプロジェクトチーム・ディレクター） 山崎 一彦

強化育成部としては、この2年間に主要競技会として位置付けた世界ユース陸上競技選手権大会（2013年：以下世界ユース）、世界ジュニア陸上競技選手権大会（2014年）、ユースオリンピック競技大会（2014年）において、全て過去最高成績を収めることができました。これも全て強化育成部スタッフ、全国の指導者のご協力と高い意識付けの賜物であった。2015年シーズンは、第9回世界ユース（カリ・コロンビア）、第1回アジアユース陸上競技選手権大会（ドーハ・カタール：以下、アジアユース）が主な国際競技会である。この主要2大会はより多くの競技者や指導者が国際競技会を経験できる場として編成を考えていきたい。

2014年11月より刷新した強化体制では、2020東京オリンピックプロジェクトチーム（以下、2020プロジェクト）と親密な連携を取っていくことによって、中長期計画に基づいた強化育成方針に舵を取ることにしたい。2020プロジェクトでは、主にタレントの選出およびタレントトランスファーなどが進行中である。タレントの選出では、国際競技力向上のためのトレーニングはもちろんのこと、最終的には必要不可欠となるコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の養成など人間的なキャパシティをを広げることを目的として、全国に配置されたタレントマネージャーの知を集積し「ダイヤモンドアスリート」として選出する。2015年1月に認定し、ダイヤモンドアスリートへの投資・支援をスタートしていく。同時進行のタレントトランスファーとは、競技および種目転向を適正にしていくことによって、競技者の才能を十分に発揮できる種目を選択し、育成していく考えである。世界ユースの選考方針において、「国際競技会を通じた経験を重要視する。ユース世代で活躍しているトップ競技者を中心に編成するが、第32回オリンピック競技大会（2020／東京）を見据え、タレントトランスファーを考慮した競技者を選出す

る。」としているとおり、タレントトランスファーの推奨と実践を図っていく。ここでは、世界水準に近い成績を達成できるようなタレントおよび種目トランスファーの戦略を模索していく。以上のように、2020プロジェクトとの連携を強化して、東京オリンピックのターゲットエイジに対する取り組みを積極的に推進していく。

国際的な流れとしては、アジア陸上競技連盟はユース世代の普及育成の充実を図るため、アジアユースを開催することとなった。アジアユースの編成方針は、「若年層の競技者に多くの国際経験を積ませることを目的とする。国内競技会を十分に考慮し、高校1年生を中心としたチーム編成とする。」とした。本連盟としては、ジュニア・ユース層の国際競技会等の派遣を推奨しているが、世界ユースとの重複参加は過度のスケジュールとなることを考慮して、原則としては高校1年生を中心としたチーム編成とすることとした。また、選考については、開催期間が5月8日から11日までとシーズン間もないことや高校総体県予選などと重複することから、2014年シーズンの競技結果および強化育成部および普及委員会の開催する研修合宿、2015年シーズンの競技会をそれぞれ考慮することとした。

強化育成部の射程となる年代は、東京オリンピック日本代表の主年層となることが考えられる。今後は、日本スポーツ振興センターおよび日本オリンピック委員会の施策なども入ってくるのが予想され、組織や考え方の大きな変革に柔軟に対応していく準備を進めていかなければならない。足元は軽く未来を託せる若手競技者育成を推進していきたい。

強化副委員長（学連連携） 植田 恭史
【方針】

1. 学生の競技レベル向上
日本陸上競技連盟の強化の対象は、学生中心が基本であると考えている。2013年度の学生陸上競技のトップ記録とトップ10の平均記録をみると、男子短距離のトップ10の記録は日本のトップ10と考える。毎年選手が入れ替わる学生トップ10のレベルを向上していくことが日本陸上競技の向上となると言える（表1）。
2. 学生選手の海外派遣（国際経験を積ませる）
より多くの学生選手に国際経験を積ませ、海外に目を向けさせることが必要だと考える。海外の試合を経験、世界の優秀な選手との交流によって刺激を得ることがこの年代の選手にとって有意義であることは言うまでもない。
3. 競技の継続支援（昨年9月の大学コーチとのミーティングで挙げた課題）
大学4年間で記録を伸ばし、22歳で卒業と同時に選手を断念せざるを得ない選手が多くいる。タレントを有した選手が競技を継続できない現状がある。報告によると、種目にもよるが陸上競技は、25歳から28歳でピークを迎えると言われる。競技を継続できる環境を整備することが求められる。
4. 強化重点種目（レベルの低い種目）の強化
学生競技レベルで、長い間低迷している種目がある。例えば、男女の中距離、跳躍、投擲などが挙げられる。低迷している種目の競技レベルを向上するために、タレントを有した選手を発掘する、あるいは他の種目から引張ってくるなど

表1 2013年度 学生トップ記録とトップ10平均記録

男子	1位	トップ10平均	女子	1位	トップ10平均
100m	10.11	10.29	100m	11.64	11.78
200m	20.21	20.64	200m	23.92	24.22
400m	46.00	46.57	400m	53.79	54.43
800m	1.47.43	1.49.27	800m	2.04.61	2.06.48
1500m	3.39.16	3.45.78	1500m	4.17.76	4.21.28
5000m	13.20.80	13.35.40	5000m	15.31.45	15.40.69
10000m	27.38.31	28.04.28	10000m	32.44.29	33.05.84
ハーフマラソン	1.01.15	1.02.07	ハーフマラソン	1.11.30	1.13.04
110mH	13.58	13.82	100mH	13.22	13.54
400mH	49.57	50.06	400mH	57.15	58.86
3000mSC	8.41.93	8.46.40	3000mSC	10.06.43	10.26.03
10000m競歩	39.06.87	40.19.87	10000m競歩	45.43.84	48.29.09
10km競歩	39.23	40.47	10km競歩	45.33	48.13
20km競歩	1.20.05	1.22.43	20km競歩	1.32.22	1.39.01
4×100mリレー	38.75	39.35	4×100mリレー	45.67	46.13
4×400mリレー	3.04.96	3.07.61	4×400mリレー	3.38.64	3.41.88
走高跳	2.28	2.18	走高跳	1.76	1.74
棒高跳	5.75	5.35	棒高跳	4.10	3.82
走幅跳	7.88	7.71	走幅跳	6.45	6.22
三段跳	16.19	15.88	三段跳	13.17	12.81
砲丸投	17.88	16.72	砲丸投	15.24	14.57
円盤投	59.21	52.56	円盤投	54.17	48.86
ハンマー投	67.07	63.92	ハンマー投	60.67	55.98
やり投	80.15	74.58	やり投	58.98	55.15
十種競技	7508	7234	七種競技	5564	5123

積極的な方策が必要である。

【方策】

1. 選手強化

- ①国内GP大会の開催数拡大
現在行われているGP大会の実施回数など。
- ②学生選手の海外派遣（4月Mt.SAC リレーズ、6月・7月のヨーロッパ遠征ほか）
- ③強化拠点校による強化講習会の実施（種目ごとに拠点となる大学を決め、そこに陸連からコーチを派遣して行う講習会を年複数回実施する）

2. 学生選手の競技継続支援

- ①支援企業の開拓（例としては、将来のオリンピック選手をサポートしませんかキャンペーンの実施）
- ②スポーツ奨学金の拡大（返還なし、半額返済）

3. 若手指導者（大学指導者）の指導レベル向上及び待遇改善の支援

- ①指導者報奨制度の設置（海外派遣、主要競技会派遣など）
- ②海外派遣制度の設置（オリンピック・世界選手権への視察研修、海外研修など）
- ③陸連公認によるコーチ格付け

全国強化責任者会議・全国普及育成担当者会議報告
(強化委員会より)

日程：2014年12月2日（火）・3日（水）

会場：味の素ナショナルトレーニングセンター

参加者：各都道府県の強化担当者、尾縣専務理事、原田康弘理事・強化委員長、強化委員会メンバー

12月2日

強化普及合同会議を大研修室にて行い、専務理事からの挨拶のあと、11月1日に発足した強化委員会新組織について原田強化委員長から、2016年リオデジャネイロオリンピックに向けた強化施策について麻場副委員長から、2020年東京オリンピックに向けた強化施策について山崎副委員長から説

明があった。なお、ここでは、2020東京オリンピックプロジェクトチームの進捗状況について報告があり、タレント発掘施策およびそのマネージャーの紹介、またタレントトランスファーマップの整備状況について本件のチーフを務める森丘保典氏から現在の状況について報告があった。

その後、強化分科会と普及育成分科会とに別れ、それぞれで会議が持たれた。なお、強化分科会では、仁川アジア大会の報告、北京世界選手権のエントリーシステム、ユージン世界ジュニア選手権の報告、南京ユースオリンピックの報告、各ブロック強化戦略について報告がなされた。これらの報告のあと、2020に向けた地域におけるタレント発掘とトランスファールというテーマで小グループに分

かれてグループディスカッションを行った。

一方、普及育成分科会では、JAAF ジュニアコーチ講習会、小学生陸上交流大会の投擲種目に関する変更について説明がなされた。その後、普及政策に関する情報提供として、タレントトランスファーマップの整備によって得られた一流競技者の育成歴調査について報告がなされ、普及育成に関する事例として新潟アルビレックスRCおよび広島かけっこキャラバンについて情報提供がなされた。これらの報告のあと、強化分科会と同様に、グループディスカッションを行った。なお、普及育成分科会では、2020に向けて何ができるか？—各地域での独自の取り組みについて—というテーマでディスカッションを行った。

12月3日

それぞれの分科会ごとに、前日のグループディスカッションでの結論についてプレゼンテーションを行った。

その後、強化分科会および普及育成分科会合同で、東京オリンピックに向けた日本陸上界の課題と題して、尾縣専務理事からの講演があった。さらに、陸上競技でも問題となっている安全対策についてビデオをみて、その重要性について確認し、室伏広治選手から講話をいただいた。

まとめ

2020東京オリンピックが迫っていること、およびそれに向けた強化施策の全容が明らかになってきたことから、参加者全員が非常に積極的に会議に参加していただいた。また、「金メダル1個を含むメダル5個」という目標に関して、尾縣専務からの「目標は明らかに高いものの、高い目標を掲げなければ思い切った施策を実行することはできない」との意思表示を受け、目標達成のために「自分たちに何ができるのか?」、また「自分たちに出来ることはないか?」との主体的に各報告事項に聞き入る姿勢が印象的であった。

その熱い眼差しをみて、陸上競技に携わる者のすべてが手を取り合って協力すれば、この目標は必ずや達成できることと確信した。

2014年度競技運営委員会研修会報告

JTO研修会～知識豊富なJTOを目指して～

競技運営委員会

期 日：2014年11月29日（土）、30日（日）

場 所：味の素ナショナルトレーニングセンター

第1日目

開会あいさつ 吉儀 宏 理事・競技運営委員長
・JTO制度の成り立ち、研修会趣旨の解説。

事務連絡 山田 峰生 審判部幹事
・資料の確認等。

研修① 総務・総務員・上訴 吉儀 宏 委員長
新記録達成の際の準備、監督会議決定事項の伝達、総務員のさまざまな役割と配置、競技注意事項のチェック、トラブル防止と発生時の対応、抗議・上訴の流れ等を解説。

研修② 審判長 鈴木 一弘 副委員長
審判長の役割の確認、抗議に対するトラブル事例等を解説。

研修③ 招集所 宮田 英明 審判部委員
招集所審判長の役割、選手の導線、持ち込み禁止の周知、ナンバーカードの止め方、忘れた時の対処、オーダー用紙の提出、混成競技の2種目目以降の招集等を解説。

研修④ スタートチーム 鎌倉 光男 審判部委員
スタートの立ち位置・腕の動き、不適切行為、不正スタートや警告時の対処行動、不正スタート発見装置、フィールド競技との兼ね合い等を解説。

研修⑤ 監察・周回 梶田 茂 審判部幹事
監察員の任務、違反行為が起りやすい例を解説。

研修⑥ 写真判定 岩崎 義治 審判部副部長
写真判定装置について、ゼロコントロールテスト、トルソーについて、1/1000秒を誤差にしない理由等を解説。

研修⑦ 跳躍 杉本 太郎 競技部幹事
白旗・赤旗のあげ方・角度について、タイマー用の黄旗のあげ方、順位記録表示板の利用方法、粘土板について、着地の計測で迷う場合、棒高跳のBOXについて等を解説。

研修⑧ 投てき 安池 滋 審判部委員
光波計測機の高温トラブル、スマートな競技運営について、日本新、ジュニア日本新が誕生した後の器具の再検査等を解説。

研修⑨ 混成競技 阿保 雅行 副委員長
控室の管理、招集所、2ピットの対応、バーの上げ方、遅延防止対策、順位ビブス等を解説。

○1日目全体質疑応答…1日目の講義について、活発な意見交換が行われた。

第2日目

研修⑩ 競歩 藤崎 明 審判部委員

JRWJとは、競歩競技に多いトラブル、掲示板について、最後の100mの判定、失格の告知、赤カードの再確認と署名、抗議対応と質問対応等を解説。

研修⑪ 道路競走 関根 春幸 競技部副部長
トランスポンダーについて、ラベリング規則、ペースメーカー、補助員・ボランティアの確保等を解説。

研修⑫ 進行・アナウンサー 中島 剛 審判部委員
競技進行の役割、異常気象の際の対応、最近の遅延の要因、EPプランで検討すべき内容、中継局との協調・対応、アナウンサーの役割、アナウンサーのIT技術の活用、TV中継・大型映像との連携、用語の統一、トラック競技とフィールド競技のバランス等を解説。

研修⑬ 世界・アジア記録 伊地知重信 競技部長
記録が公認されるための条件、世界記録・アジア記録の公認と日本記録の公認の相違点、自転車計測等を解説。

研修⑭ 報道・表彰 田中 康之 競技部委員
全選手のミックスゾーン通過について、ミックスゾーンに誘導する際の注意点、担当総務員の配置、競技終了後の業務等を解説。

シンポジウム～2020東京オリンピック競技運営準備～

①IAAFの委員を務めている立場から

関 幸生 陸連事務局

IAAFの技術委員会の役割・出版物、メンバーであるメリット、ITOであることのメリット、新しいルールが決定される背景、国際大会に向けての注意点、パラリンピックについて等を紹介。

②国際大会のTICを担当した立場から

関根 春幸 競技部副部長

TICの業務について、LOCやTDからの緊急連絡について、抗議等の受け付け、ボランティアの活用等を紹介。

③国際大会のEPを担当した立場から

中島 剛 審判部委員

世界選手権の失敗事例、東京オリンピックに向けてのEP等を紹介。

④審判編成計画とその育成構想 鈴木 一弘 副委員長
審判員の養成計画・構想、審判員の確保、リハーサル大会、英会話、研修など今の段階での構想を紹介。

○2日目全体質疑応答…2日間の講義について、活発な意見交換が行われた。

コメンテーターより

藤田 幸雄 特別委員

東京オリンピックで良い競技運営ができるように期待をしている。

開会あいさつ 吉儀 宏 理事・競技運営委員長
ぜひ自分の所属陸協でもJTOとして指摘をし、足元を固めていただきたい。

2014年度全国普及育成担当者会議報告

事務局

2014年度全国普及育成担当者会議を、全国47都道府県陸上競技協会普及育成担当者参加のもと2014年12月2日（火）、3日（水）の2日間にわたり味の素ナショナルトレーニングセンターにおいて開催した。会議は3部構成で行い、今回は初めて、1泊2日で開催した。

1日目2日の第1部は、強化委員会と合同で実施し、2016年リオデジャネイロオリンピック、2020年東京オリンピックに向けての取り組みや、トランスファーの推進についての報告を行った。

第2部は分科会とし、普及育成事業の概要について説明を行った。

〈指導者育成関係〉

1. JAAF公認ジュニアコーチ（日体協公認指導員）養成講習会

2014年度の開催地は12会場（北海道・福島・新潟・埼玉・東京・静岡・三重・愛媛・大阪・兵庫・広島・宮崎）。今後も各地域1会場以上での実施を目指す。

2. JAAF公認コーチ（日体協公認コーチ）養成講習会

今年度は、2014年12月23～26日に味の素ナショナルトレーニングセンターで開催。

①指導者資格有資格者の義務研修 2012年度より日体協公認スポーツ指導者管理システムが各陸協で利用可能なため、各陸協で開催している義務研修に該当する講習会を資格更新のための講習会として申請するよう呼びかけた。

②U16指導者講習会 今年度は、長野・東京・香川・山梨で行う。来年度については、学校教員にも積極的に参加していただくように教育委員会にも呼び掛けをおこなっていく予定である。

〈普及関係〉

1. 全国大会の引率資格

全国大会の監督、引率への指導者資格の義務付けについて、現状のルールを確認した。

2. “日清食品カップ”全国小学生陸上競技交流大会

- ・31回大会について 第31回大会の要項を提示。また次回大会においては宿舎が分宿となることについて説明をした。
- ・投てき種目の変更について 32回大会からの投てき種目をヴォータックス投に変更することについて提案し、承認された。

3. 第10回全国小学生陸上競技交流大会優秀選手研修会

2014年11月1～2日に横浜市スポーツ医学科学センターにて体力や形態計測を実施。交流会には、2014年日本選手権100m優勝の桐生祥秀選手（東洋大学）、福島千里選手（北海道ハイテックAC）を迎え開催した。

4. “日清食品カップ”全国小学生クロスカントリーリレー研修大会

第17回大会の要項を提示。2014年12月13～14日に開催予定。

5. JAAF発掘育成プロジェクトクリニック事業

2014年度はU13については9会場、U16については11会場で開催する。

6. U16トップトレーニングキャンプ

2015年1月10～12日に味の素ナショナルトレーニングセンターにて開催予定。

7. U16ブロック研修合宿

2014年度は、各地域9ブロック（8会場）で実施。

全体を通しての質疑応答では、第32回全国小学生陸上競技交流大会からのヴォータックス投の導入についての質問や、指導者資格有資格者の義務研修について、資格更新のメリットがないため資格者も更新しないのではないかといった意見が出された。意見については今後さらに検討していく方向でまとまった。

その後、各都道府県陸上競技協会やクラブの独自の取り組みの事例報告として、広島陸上競技協会が行っている「広島かけっこキャラバン」について東川安雄副委員長から、新潟アルビレックスRCのクラブ運営について大野公彦委員から発表を行った。また普及政策の取り組みとして一流競技者の生育歴調査として伊藤静夫副委員長より報告を行った。

翌3日は、第3部としてグループディスカッションを実施し、「2020年東京オリンピックに向けて何ができるか？・各地域の独自の取り組みについて」というテーマのもと都道府県のブロックごとに分かれ、各都道府県陸上競技協会の普及育成担当者同士、そして普及育成委員会委員が情報交換する場として設定した。各グループでそれぞれの都道府県の普及の取り組み・また独自に実施している取り組みについての発表を行い、まとめ、最後にブロックごとに全体へ報告する形式で行った。以下がブロックごとの内容である。

【北海道・東北ブロック】小学と中学でうまく連携を取りながらタレント発掘や種目間でのトランスファーのサポートをしていきたい。また、指導者不足解決のため講習会なども積極的に取り入れていきたい。

【関東ブロック】小学生向けの陸上教室や大会、また小学生の登録制度を行っている。今後、普及についての情報交換会も実施していきたい。

【東海・近畿ブロック】大学、高校のコーチが小学生に指導している。一貫した指導をする上で、指導者さらには親もスキルアップが必要ではないか。

【近畿ブロック】行政や他競技団体と連携しながら普及に取り組んでいる。指導者同士の連携も大切である。

【中国・四国ブロック】一流選手を呼んで陸上教室やサイン会を行っている。2020年に向けて陸連から積極的に講師を派遣していただきたい。

【九州ブロック】タレント発掘と指導者の連携を行っている。また九州がひとつになって普及と強化に取り組んでいきたい。

本年度から2日間にわたっての実施であったが、多くの意見が出、普及育成担当者同士の情報交換・交流の場となり、非常に有意義な会議となった。また昨年から実施しているグループディスカッションでは、都道府県間での意見交換の場となり、有益な時間となった。普及育成委員会として、中央からの連絡事項の伝達に留まることなく、各陸上競技協会からの意見を求め、陸上競技連盟として普及活動の方策を考える上で非常に有益であった。以上の他にも貴重な意見が得られ、それを普及育成委員会で検討していくことを報告した。

今後、質問や意見などがある場合は、陸連事務局を通じて検討していくことを確認し、会議を終了とした。

“日清食品カップ”第17回全国小学生クロスカントリーリレー研修大会報告

普及育成委員会 井筒 紫乃

本大会は、1985年より開催している「日清食品カップ」全国小学生陸上競技交流大会の一環として、1999年より始まり17回目を迎えた。全国の小学生が自然に富んだクロスカントリーに親しむことにより、走ることの楽しさと正しい技能・トレーニングの習得及びよい友達づくりを目的とし、2014年12月13日（土）・14日（日）の2日間で開催した。

第1日目は、大阪府池田市民会館（アゼリア大ホール）において、全国47都道府県代表チームと地元大阪の3チームを加えた50チーム400名の選手および100名の指導者の参加により、開講式と研修会、監督会議を行った。北海道チームについては、悪天候のための遅延により、開始時間に間に合わないというアクシデントがあった。

午後2時より開講式を行い、主催者を代表して普及育成委員会東川安雄副委員長の挨拶、後援をいただいている池田市小南修身市長の歓迎の挨拶により執り行った。

開講式後、選手と指導者は引き続き大ホールにて研修会に参加した。また、監督会議をコンベンションルームで行った。

研修会は普及育成委員会普及育成部井筒紫乃U-13担当幹事と大畑好美委員により、日清食品グループ陸上競技部白水昭興監督、アテネオリンピックマラソン代表諏訪利成コーチへの質疑を交えながら講義を行った。「楽しく学ぶ」ことをコンセプトに、講義はクイズ形式で進め、正解と思われる番号を選択し挙手してもらった。正解については詳細に説明を加えた。その内容の一部・概要は以下の通りである。

1. 小学生の練習によるからだの負担について

Q…小学生が1日に走る距離は多くて何kmくらいがちょうどいいでしょうか？

- ①20km ②15km ③10km ④5km

答え…④ 理由：12歳の頃の心臓の大きさは大人の60%であるため

※5kmに挙げた選手も多かったが10kmに手を挙げた選手も少なくなかった。小学生の適正なトレーニング量について指導者への啓蒙が必要であると思われる。

Q…毎日の練習で1000m×5本などのインターバル練習は、小学生としてちょうどいいでしょうか？

- ①ちょうどいい ②少なすぎる ③多すぎる

答え…③ 理由：小学生のインターバル練習は骨や心臓への負担が大きすぎる。

2. ジュニア選手の食事の基本について

Q…長距離選手にとって大切な栄養素は「炭水化物」ですが、どのような食品を食べればよいでしょうか？

- ①野菜 ②お肉 ③お魚 ④ご飯・パン

答え…④ 理由：エネルギーをつくる役割があるため

この他にも運動量に見合うエネルギーと各栄養素の大切さ、栄養バランスや「主食」「主菜」「副菜」「牛乳・乳製品」「果物」を含めた食事の大切について説明があった。

3. 様々な運動をすることの大切さについて

Q…現在、トップの選手の中で子どもの頃に多かったのはどのタイプ？

- ①ゲームばかりしていた
②走ることに専念していた

③走ることも好きだけど、他のスポーツもやっていた

答え…③ 理由：子どもの頃は神経系の発達が著しいため

諏訪利成コーチからは、「子ども時代にはサッカーや野球、鬼ごっこなどたくさん外で遊んでいた」と多様な運動経験の大切さが伝えられた。

また、神経系トレーニングに有効な「ジャンケンゲーム」や「キャッチ」で盛り上がった。最後に川内優輝選手の中学時代の1500mの記録についてのクイズ、白水監督、諏訪コーチから小学生へのアドバイスが伝えられた。

監督会議では、主催者挨拶の後、主管・大阪陸上競技協会から大会運営について説明があった。プログラムに記載の監督・競技者注意事項にそって、コースの説明、スパイクシューズの使用禁止、ウォーミングアップの際の注意事項など、事故なく、スムーズな競技運営のために入念な打ち合わせを行った。

研修会終了後「インスタントラーメン発明記念館」への移動となった。記念館では担当者の説明を熱心に聞いていた。

第2日目は万博記念公園内特設コースにおいて、クロスカントリーリレー大会を開催した。好天に恵まれた中、大阪陸協の会場管理係の皆様の入念な準備と運営にて実施した。

開会式は主催者を代表して、横川浩会長の挨拶、後援をいただいている協賛者を代表して日清食品ホールディングス株式会社代表取締役社長CEO安藤宏基氏のご挨拶、そして参加者を代表して青森県・東英ランニングクラブ工藤新太選手、今井未夢選手による力強い選手宣誓があり、開会式が終了した。

宿舍の関係で昨年より30分遅い11時30分から友好タイムトライアルを行い、諏訪コーチも参加した。11時50分にクロスカントリーリレーがスタートした。男女各3名ずつ計6名の選手によって禰りレーが行われ、兵庫県代表の北浜JRCが接戦を制した。今年も1位と2位のタイム差が2秒という白熱したレースとなった。レース終了後表彰式を行い、入賞チームと区間最高記録賞の選手を表彰した。

後援・協賛の各団体と主管いただいた大阪陸上競技協会の皆様に感謝申し上げます。

尚、大会の全記録は日本陸連ウェブサイトをご覧ください。

〈入賞チーム成績〉

順位	チーム名	都道府県	記録
第1位	北浜JRC	兵庫	31分22秒
第2位	道南JSC	北海道	31分24秒
第3位	アラマキッズ	群馬	31分49秒
第4位	芳賀真岡陸上クラブ	栃木	31分52秒
第5位	チーム柏	千葉	31分53秒
第6位	田原陸上クラブ	愛知	32分04秒
第7位	井村RC	岡山	32分05秒
第8位	沖縄アンテローブ	沖縄	32分08秒

〈区間最高記録〉

第1走者	第2走者	第3走者	第4走者	第5走者	第6走者
宮島 恵那	越 陽汰	佐々木 奈菜	川原田 純平	長井 愛奈	山口 大翔
北浜 JRC	川中島 JRC	道南 JSC	花巻 ACjr.	チーム 柏	チーム 柏
兵庫	長野	北海道	岩手	千葉	千葉
5分02秒	4分46秒	5分18秒	4分58秒	5分11秒	4分57秒

国際陸上競技連盟 (IAAF) カウンシル会議報告

国際委員長 田中 克之 (IAAF カウンシル)

2014年最後のカウンシル会議が11月18～20日に亘りモナコで開催されたところその概要は下記の通りである。なお、今次会議の最大のポイントは2019年の世界選手権の開催地が選挙の結果、僅差でドーハ(カタール)に決まったことであった。もう一つの重要ポイントは、「陸上競技をより魅力的なものにするための方策」についてこれまで有識者の間で議論されたところと併せ、魅力化のための諸提案が中間報告され、「これら提案について更に関係者間で議論し2015年8月のIAAF総会(於北京)までに結論を出す」との方向付けが行われたことである。

1. 2019年世界選手権開催都市決定

- (1) 立候補都市はユージン(アメリカ)、バルセロナ(スペイン)、ドーハ(カタール)の3都市であった。何れの都市も魅力的な候補市ではあるが同時に弱みも持っていた。例えば①ユージンは、アメリカで一番陸上競技が盛んなオレゴン大学の所在地であり、かつスポーツ用品で名高いナイキが同じオレゴン州に所在することもあり、ここで世界選手権を行えば全米の関心を呼ぶことになると思われる反面、地方の小都市であるだけに宿泊施設が十分に確保されるか、又スタジアムを満杯に出来るかという不安がある。②バルセロナについては1992年のオリンピック時の施設を殆どそのまま使用可能であり宿泊施設も十分である反面、既に陸上競技が普及しているスペインにあっては陸上競技の広がりや余り期待できないという弱点がある。③ドーハについては中東地域全体に陸上競技を浸透させる良い機会となる反面、(ドーハが開催時期として提案する9月末から10月初めであっても)朝晩といえども30度を上回り午後に至っては40度近くにもなる猛暑という弱点がある。
- (2) 3都市による最終プレゼンテーションの後、投票に付されたところ、結果はドーハ12票、ユージン9票、バルセロナ6票であった。この結果バルセロナが落選し、ドーハとユージン間で第2回投票が行われたところドーハ15票、ユージン12票となりドーハが開催都市として選出された。

2. 今後のWAS大会開催都市決定

今後のWAS(World Athletics Series = IAAF主催)大会開催都市は以下のように決定された。これまで開催実績が殆どなかったアフリカの都市が選定されたのが特色である。

- ①2018年コンチネンタル・カップ
Ostrava(チェコ)が大差でBydgoszcz(ポーランド)

に勝ち開催都市に決定

- ②2017年世界クロスカンントリー選手権
Kampala(ウガンダ)が大差でManama(バーレーン)に勝ち開催都市に決定
- ③2017年世界ユース選手権
Nairobi(ケニア)が唯一の候補都市であり無投票で開催都市に決定
- ④2015年及び2017年のワールドリレーズ
Nassau(バハマ)が唯一の候補都市であり無投票で開催都市に決定

3. 世界選手権及びWAS魅力化のための諸提案

陸上競技への関心が徐々に低下していることから、如何にして世界選手権及びWAS大会を魅力的なものにするかということがこれまでのカウンシル会議でも話題になり、既にこのための作業部会が設置されている。今次会議には同作業部会が外部の有識者を集め開催したワークショップ(2014年9月16～17日於ロンドン)で出された多くの提案が紹介された。

カウンシルはこれら提案の詳細について具体的な討議を行わなかったが、これら提案を今後議論し明年のIAAF総会までに結論を出すとの方向付けを行った。

カウンシル会議で紹介された「陸上競技を巡る懸念事項」は概ねつぎの通りである。

(1) 陸上競技を巡る懸念事項

- ①陸上競技に関心を持つ層の高齢化：2013年モスクワ世界選手権のTV視聴者の70%は55歳以上(若い世代はTVを見ない)
- ②TV放映網の細分化と無料放映網の増大の危険(伝統的TV局視聴者の減少)
- ③他のスポーツ及び興行(エンターテインメント)の伸張
- ④ウサイン・ボルト以外の超スター選手の不在
- ⑤ヨーロッパ選手の凋落

(2) 提案

- ①陸上競技ファンの多い場所での開催
- ②世界選手権のプログラムの合理化
- ③フィールド競技の実施方法の変更
- ④混成競技の実施方法の変更
- ⑤道路競技の見直し
- ⑥世界選手権参加選手数
- ⑦世界選手権の開催時期
- ⑧世界室内選手権や世界ジュニア選手権での新しい試み
- ⑨インターネット視聴
- ⑩会場にしながらスマートフォンを使ってのデータ入手
- ⑪イベント・プレゼンテーションのIAAFによるコント

ロール

⑫消費者（大衆）への接近

4. リオデジャネイロオリンピック決勝の時間帯

前回のカウンシル会議でIOC（国際オリンピック委員会）よりIAAFに対し「世界中の国々のゴールデンアワーに陸上競技の決勝を放映することにより、陸上競技の放映価値を最大化するため、いくつかの陸上競技種目の決勝を午前のセッションで実施できないか再検討してほしい」旨の要請があった。これを受けその後、競技コミッションによる検討が行われ、結論として「13種目決勝を午前のセッションで行う」との提案がカウンシルに行われた。一部に反対するメンバーもいたが最終的にこの提案は採択された。なお13種目の内訳は男女マラソン、男女20km競歩・男子50km競歩、男女3000m障害物、男女円盤投、女子10000m、男子400mH、女子ハンマー投、男子三段跳である。

5. その他の主要決定事項

(1) 2015年ワールドリレーズ参加標準記録及びメドレー・リレーの導入承認

①2015年ワールドリレーズの4×100m、4×400mの参加標準記録が承認された。

- 女子 4×100mリレー：44.00
4×400mリレー：3:33.50
- 男子 4×100mリレー：39.00
4×400mリレー：3:04.10

②2014年ワールドリレーズで実施した4×1500mリレーを取りやめ2015年大会では、メドレーリレー（1200m、400m、800m、1600m）を導入することが承認された。

(2) 南スーダンのIAAF加盟承認

南スーダンは2011年7月に独立国家となったが今般、同国陸連よりIAAF加盟申請が行われた。申請内容を検討し同国の申請を暫定的に承認することが決定された。これにより南スーダンはIAAFの213番目の加盟団体となる。この決定により、南スーダンは実際上、IAAF加盟団体としてのあらゆる権利・義務を享受することになるが、正式な加盟団体となるためには、2015年8月の北京でのIAAF総会の決定を待つ必要がある。

(3) IAAF新ドーピング防止規則の承認

世界ドーピング防止規程は2013年に採択されたが、2014年のモスクワでのIAAF総会においてカウンシルは同規程に準拠するIAAF新ドーピング防止規則を承認する権限を付与された。今次カウンシル会議に法務コミッションからIAAF新ドーピング防止規則案が提出され、カウンシルはこれを承認した。この新規則は2015年1月1日付けで施行される。

(4) 新しいIAAF国際競歩審判員の承認

近年IAAFは4年ごとに国際競歩審判員の構成メンバーを見直してきているが、今回、2015~2018年の間のIAAF

主催大会で審判を務める構成メンバー26名がカウンシルに提案され、審議の上提案された全メンバーを承認した。

地域別に見れば欧州14名、北中米カリブ4名、アジア4名（中国、香港2名、マレーシア）、オセアニア2名、南米及びアフリカ各1名で欧州への偏りが見られる。

(5) スタジアム外競技技術代表セミナーの開催期日と参加者の承認

今後のIAAFスタジアム外競技（競歩、マラソン、クロスカントリー等）の技術代表候補者を集めて開催されるセミナーの開催期日（2015年6月1~2日）及び候補者24名が提案され、カウンシルはこれを承認した。なお候補者を地域別に見れば、欧州11名、アジア4名（日本（関幸生氏）、中国、インド、シンガポール各1名）、オセアニア4名、北中米カリブ2名、アフリカ2名、南米1名となっている。

(6) 北京世界選手権の参加標準記録の承認

2015年北京世界選手権の10000m、マラソン、競歩及び混成競技の参加標準記録は2014年4月のカウンシル会議で承認済みであったが、今次会議ではその他の種目の標準記録について提案が行われ、カウンシルはこれを承認した。IAAFサイトで確認ができる。

<https://iaafmedia.s3.amazonaws.com/competitioninfo/544c7d0a-0807-4226-a85b-79928c58a097.pdf>

(7) 2015、2016年のIAAF主催大会に派遣される公式役員の承認

2015年、2016年のIAAF主催大会に派遣される役員については、これまでも順次発表されてきたが、今次会議においても何人かの公式役員が指名され、カウンシルはこれを承認した。日本関係では山澤文裕氏が2015年貴陽市（中国）で開催の世界クロスカントリー選手権の医事・ドーピング代表として指名・承認された。

6. 事務総長報告

カウンシル会議では毎回、事務局の動き、加盟団体の動き、委員会・コミッションの動き、IAAFと他のスポーツ関連団体との関係等について事務総長より報告が行われる。今回は次のような点が注目された。

(1) 市民権の変更に関する分析結果報告

(2) 最近のWAS大会の評価分析

- ①2014年開催のWAS大会参加加盟団体、参加者数等分析
- ②世界ジュニア選手権（アメリカ・ユージン）の評価
- ③コンチネンタル・カップ（モロッコ・マラケシュ）の評価
- ④ユース・オリンピック（WAS大会ではない）陸上競技の評価

日本陸連アスレティック・アワード2014報告

事務局

◆年間表彰式、日本陸連アスレティック・アワード2014を開催

2014年12月22日（月）に「日本陸連アスレティック・アワード2014」をザ・プリンスパークタワー東京において開催しました。

本表彰式は、その年の日本選手権優勝者の栄誉を称えとともに、国内外の大会での活躍が顕著であった競技者や陸上競技を通じて社会に貢献した競技者・関係者を表彰するもので、今回で8回目の開催となりました。



横川浩会長

当日は、選手56名と、日ごろ陸上競技界をご支援いただいているスポンサー各社、関係者の方々146名にご出席を賜り、受賞者をお祝いするとともに、ご出席者同士での交流を深められておりました。

〈式次第〉

1. 主催者挨拶	横川 浩	公益財団法人日本陸上競技連盟 会長
2. 来賓挨拶	竹田 恒和	公益財団法人日本オリンピック委員会 会長
	布村 幸彦	一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 常務理事兼副事務総長
3. 表彰の部		
新人賞	発表者	尾縣 貢 公益財団法人日本陸上競技連盟 専務理事
	授与者	増田 創至 東京運動記者クラブ 陸上分科会 代表幹事
	授与者	友永 義治 公益財団法人日本陸上競技連盟 副会長
特別賞	発表者	河野 洋平 公益財団法人日本陸上競技連盟 名誉会長
	授与者	河野 洋平 公益財団法人日本陸上競技連盟 名誉会長
優秀選手賞	発表者	三宅 勝次 公益財団法人日本陸上競技連盟 副会長
	授与者	三宅 勝次 公益財団法人日本陸上競技連盟 副会長
アスリート・オブ・ザ・イヤー	発表者	横川 浩 公益財団法人日本陸上競技連盟 会長
	授与者	横川 浩 公益財団法人日本陸上競技連盟 会長
4. 歓談の部	乾 杯	土方 政雄 アシックスジャパン株式会社 代表取締役社長
アトラクション		* 日本記録樹立者インタビュー 川元 奨選手、鈴木 雄介選手 * 来場者インタビュー

2014年受賞者

アスリート・オブ・ザ・イヤーは右代啓祐選手

2014年のアスリート・オブ・ザ・イヤーに輝いたのは第17回アジア競技大会（仁川）で同大会同種目24年ぶりの優勝を果たした十種競技の右代啓祐選手（スズキ浜松AC）。右代選手は自身の日本記録を2度更新するなど2014年の活躍は素晴らしいものでした。

優秀選手賞には、同じくアジア競技大会50km競歩で大会

記録を更新し同種目日本人初優勝を果たした谷井孝行選手（自衛隊体育学校）、更に16年ぶりの同大会同種目優勝を遂げた男子4×400mリレー日本代表の金丸祐三選手（大塚製薬）、藤光謙司選手（ゼンリン）、飯塚翔太選手（ミズノ）、加藤修也選手（早稲田大学）、高平慎士選手（富士通）を選出しました。

特別賞には、1995年の第79回日本陸上競技選手権大会から優勝を重ね、2014年、前人未到の20連覇を達成した室伏広治選手（ミズノ）を選出。18度の日本記録更新、オリンピック・世界選手権大会でのメダル獲得等、長くトップアスリートとして活躍することを通じて、後に続く選手達に範を示すとともに、ハンマー投、更に広く陸上競技に対する社会的関心を高めた、その功績を称えての授賞となりました。

そして新人賞には、東京運動記者クラブからは、2014年の織田幹雄記念国際陸上競技大会男子やり投で、自己記録を7m以上更新する85m48をマークし、その後日本選手権初優勝、更にアジア大会での銀メダル獲得など今年躍進を遂げたスズキ浜松ACの新井涼平選手に、女子は、青山聖佳選手（松江商業高校）が選出されました。青山選手はインターハイで200m、400mで2冠を達成。アジア大会400mでも5位。さらにその後の国民体育大会では400m優勝、100m2位の記録を残す等、100mから400mまで走れる能力の高さに期待を込めての受賞です。

日本陸連選出として、ユージンで行われた世界ジュニア選手権10000m競歩で大会新記録で同種目日本人初優勝を果たした松永大介選手（東洋大学）が2014年新人賞に輝きました。

受賞者のスピーチ（抜粋）：表彰順

新人賞：青山聖佳（松江商業高校）

※東京運動記者クラブ選出
自分がこのような賞をいただけるとは思ってもいなかったので、今、すごくびっくりしています。来年も、今年以上の活躍ができるように頑張りたいと思います。



青山聖佳選手

本日は本当にありがとうございます。

新人賞：新井涼平

（スズキ浜松AC）
※東京運動記者クラブ選出
本日はこのような名誉ある賞をいただきありがとうございます。この賞をいただけたことも、皆様のご声援・ご支援があったからだ



新井涼平選手

と思います。

来年が勝負の年になるので、更に大きくなって、メダルを獲れるように頑張りたいと思います。これからもよろしくをお願いします。

新人賞：松永大介（東洋大学）

※日本陸連選出

本日はこのような素晴らしい賞をいただきありがとうございます。

今年は非常に多くの経験をさせてもらいました。来年以降、この賞に誇りと自信を持って、活躍できるように頑張りたいと思います。

特別賞：室伏広治（ミズノ）

40歳になった私が賞を受けることができ嬉しく思っています。

20年というのは道のりが長くて、体調がよいことばかりではないのですが、体調を大会に合わせ、競技を行えたのも皆さんの温かいご支援のおかげだと思っています。

日頃より本当に感謝しております。

私は、「なぜ長く競技ができるんだ?」「モチベーションがなぜ続くんだ?」とよく聞かれますが、若かりし頃の私と今の私とではトレーニングの方法を変えています。上手にトレーニングのやり方を変えていく、物の考え方を変えていくというように、ステージを順に追っていています。

私の今後の目標ですが、若いアスリートにもっともっと伸びてほしいと思っていますので、私自身がスプリングボードのような存在となり、皆さんを押し上げていくような、そういうモチベーションで競技に臨むことができればと思っています。

今日は本当にありがとうございました。

優秀選手賞：谷井孝行

（自衛隊体育学校）

本日はこのような名誉ある賞をいただき、本当にありがとうございます。

今年のような結果が得られたのも支えてくれる皆さん、応援してくれる皆さんがいたからこそ、本当に感謝しています。

（今年は）自分の中では、4年計画の中の2年目であって、来年、再来年に今年の結果が繋がって初めて今年がよかったと言えると思いますので、この賞に恥じない活躍ができるよう、来年、再来年も頑張っていきたいと思っています。

優秀選手賞：4×400mリレー

金丸祐三（大塚製薬）・藤光謙司（ゼンリン）・飯塚翔太（ミ

ズノ）・加藤修也（早稲田大学）・高平慎士（富士通）

〈代表して金丸選手がコメント〉

本日はこのような大変名誉ある賞をいただきありがとうございます。

私が代表して挨拶をするというのは、先輩の藤光さん、高平さんを差し置いてのことで少し恐縮しております。

特に今年のアジア大会では、200mの選手を3名加え、韋駄天スプリンターズ一丸となって獲った金メダルだと思っています。

4×400mリレーという種目は、アテネオリンピックの4×100mリレーと共に4位入賞し、私が出場した2005年のヘルシンキ大会からずっと、4×100mリレーの活躍に隠れてきた種目でもありました。

今年、ようやくアジア大会での金メダルという栄誉を勝ち取ることができ、4×400mリレーチームとして形が作れたのではないかと考えております。

やはり勝負は世界ということで、来年、再来年と世界選手権、オリンピックに向けて、4×400mリレーが、よりよい賞をもらえるよう、この受賞を励みに、また明日から頑張っていきたいと思っています。

アスリート・オブ・ザ・イヤー：

右代啓祐（スズキ浜松AC）

本日は、名誉ある賞をいただくことを本当に嬉しく思います。

今年は、日本記録を2回更新し、アジア大会では念願の金メダルを獲得することができました。これもひとえに多くの方のご支援・ご協力があったことだと思っています。

来年は北京で世界選手権、再来年はリオでオリンピックがあります。僕は、十種競技でメダルを獲りたいという思いで競技を始めています。この2年間、更なる飛躍ができるよう頑張ってまいりたいと思いますので、これからもご支援・ご協力お願いいたします。

本日はありがとうございました。



松永大介選手



室伏広治選手



谷井孝行選手



金丸祐三選手



右代啓祐選手



日本陸連栄養士の発足について

医事委員会委員 田口 素子

2008年より医事委員会と普及育成委員会は合同で「日本陸連食育プロジェクトチーム」を発足させ、ジュニア選手の食事指導、各種講習会における栄養セミナーの拡充、資料作成や情報発信と共有化などを進めてきた。一方、実業団では栄養に関するニーズの高まりとともに管理栄養士を雇用して栄養管理を実施するなど、陸上競技にオフィシャルに関わる管理栄養士が増えてきたと考えられる。そこで、今後はコンテンツの更なる充実を図り、トップ選手からジュニア選手まで広く栄養サポート・栄養教育の機会を広げていくために、日本陸連栄養士会を発足させた。



総合討論の様子

第一回の日本陸連栄養士会は2014年11月23日（日）の9:00～16:00に味の素ナショナルトレーニングセンター会議室にて開催し、都道府県陸協より2名、実業団管理栄養士・食育スタッフ8名、食育プロジェクトメンバー5名の計15名が参加した。はじめに、山澤文裕医事委員長から日本陸連栄養士会に期待することをお話いただき、表1に示したミッションとゴールについて共有した。また、食育プロジェクトチームからは、食育プロジェクトのこれまでの活動（大畑好美普及育成委員）、日本陸上競技界における栄養サポートの歴史とIAAFスポーツ栄養コンセンサスの解説（田口素子医事委員）、トップアスリートへの指導展開（長坂聡子普及育成委員）について紹介し、サクラダイニングで食事提供コンセプト及び栄養チェックシステムMellonの使い方について、サ

クラダイニングとJISS栄養グループの協力により説明を受けた。参加者からは、（株）ワコール女子陸上競技部の澤野千春氏より実業団における栄養サポートについて、栃木陸上競技協会の鈴木いづみ氏より県陸協における栄養サポートについて紹介していただき、陸上選手に対する栄養サポートの現状と日本陸連栄養士会の展望についての総合討論を実施した。現場の課題として下記のような内容が挙げられた。

- ・ジュニア選手に対する積極的な栄養教育が必要である。
- ・特に女子ではジュニア期に食事や月経について十分に教育をされていない選手が多く、問題意識が低い選手も多いため、栄養教育が必要である。
- ・食べているつもりでもエネルギーのバランスが取れておらず、相対的なエネルギー不足を起している可能性がある（エナジーアベイラビリティの問題）。
- ・月経がこななくても走れていれば良いと考えている選手に対し、どのように指導をすればよいか分からないため、勉強する機会がほしい。
- ・栄養摂取に関する問題解決には指導者の理解が必要となるため、指導者（特に高校の女子長距離）を対象として月経や食事に関する教育に力を入れる必要がある。

これらの意見を踏まえ、今回参加できなかったチームや陸協の管理栄養士にも呼びかけてスポーツ栄養のネットワークづくりを促進し、医事委員会のドクターより講義をうけるなど、定期的な情報交換と勉強会を実施することになった。現場からの栄養サポートのニーズやご意見などをいただければ幸いである。

表1 日本陸連栄養士会のミッションとゴール

ミッション
1. スポーツ栄養に関して、共通の言葉で話し合えるようになること
2. 様々な陸上競技のシーンに合わせたスポーツ栄養について情報を交換すること
3. 地域とクラブチームでのスポーツ栄養に関する情報を交換すること
4. ジュニアからシニアにかけて栄養管理について連携し、橋渡しをすること
5. スポーツ栄養に関する教育、啓発、コミュニケーションを広く行うこと
6. 地域におけるスポーツ栄養体制を充実させること
7. スポーツ栄養とスポーツ医学の融合を推進させること

ゴール
1. 我が国の陸上競技における、エビデンスに基づいたスポーツ栄養を確立すること
2. それを広く世の中に広めるために適切なガイドブックを作成すること
3. 2020年東京オリンピック・パラリンピックおよびその後の国際大会で活躍する競技者のパフォーマンスを高めること



第一回日本陸連栄養士会に出席したメンバー

大会観戦ガイド

第34回大阪国際女子マラソン大会 兼第15回世界陸上競技選手権大会(2015/北京) 代表選手選考競技会 兼第99回日本陸上競技選手権大会女子マラソン

- ▼日時：2015年1月25日(日)12時10分スタート
- ▼会場(スタート・フィニッシュ)：
大阪・ヤンマースタジアム長居
大阪市東住吉区长居公園1-1 TEL：06-6691-2500
- ▼コース：ヤンマースタジアム長居～昭和町～今川2～
大池橋～勝山4～森ノ宮～OBP～北浜～大阪市役所
～御堂筋・道頓堀橋南詰折り返し～淀屋橋～片町～大
阪城公園～森ノ宮～勝山4～大池橋～今川2～昭和町
～ヤンマースタジアム長居(42.195km)
- ▼アクセス：ヤンマースタジアム長居
市営地下鉄御堂筋線「長居駅」、JR阪和線「長居駅」
または「鶴ヶ丘駅」下車
- ▼テレビ放送予定：関西テレビ系(全国ネット)
1月25日(日)12時00分～
- ▼問合せ先：大阪国際女子マラソン大会事務局
TEL：06-6633-9632
- ▼大会ホームページ：<http://www.osaka-marathon.jp/>



昨年、第33回大会のスタート

2015日本ジュニア室内陸上競技大阪大会

- ▼期日：2015年2月7日(土)9：30競技開始(予定)
2月8日(日)9：30競技開始(予定)
- ▼会場：大阪・大阪城ホール
大阪市中央区大阪城3-1 TEL：06-6941-0345
- ▼アクセス：JR大阪環状線大阪城公園駅下車西へ徒歩5分
- ▼競技種目：
【2月7日(土)】
中学生の部 男子 60m 60mH 走幅跳 棒高跳
女子 60m 60mH 走幅跳

ジュニアの部 男子 60mH 三段跳
女子 60mH

【2月8日(日)】

中学生の部 男子 800m
女子 800m

ジュニアの部 男子 60m 1500m 走高跳 棒高跳
走幅跳
女子 60m 1500m 走高跳 棒高跳
走幅跳

▼問合せ先：大阪陸上競技協会 TEL：06-6697-8899

▼大会ホームページ：<http://www.jaaf.or.jp/taikai/1224/>



2014年大会ジュニア男子60m

第50回千葉国際クロスカントリー大会 兼第41回世界クロスカントリー選手権大会 日本代表選手選考会

- ▼期日：2015年2月8日(日)
- ▼会場：千葉・千葉市「昭和の森」
千葉市緑区土気町22 TEL：043-294-2884
- ▼アクセス：JR土気駅下車千葉中央バス「大網駅行」
で「昭和の森」下車(当日土気駅北口～昭和の森無料
臨時バスの便あり)
- ▼種目・スタート時刻：
中学の部 女子3km 10：40
男子3km 11：00
ジュニアの部 男子4km 1組 11：20
男子4km 2組 11：40
男子8km(選考種目) 12：00
女子5km(選考種目) 12：40
一般の部 男子12km(選考種目) 13：10
女子8km(選考種目) 14：00
男子4km 14：40
- ▼問合せ先：千葉陸上競技協会 TEL：043-252-7311
- ▼大会ホームページ：<http://www.jaaf.or.jp/taikai/1225/>

事務局からのお知らせ

◆◆千葉国際クロスカントリー大会を2月8日(日)、福岡国際クロスカントリー大会を2月21日(土)に開催!◆◆

本連盟主催のクロスカントリー大会を下記にて開催します。

【第50回千葉国際クロスカントリー大会】

日時：2015年2月8日(日) 競技開始時刻10時40分

会場：千葉県・千葉市「昭和の森」

種目：一般の部 男子12km・男子4km・女子8km
ジュニアの部 男子8km・男子4km・女子5km
中学の部 男子3km・女子3km

【第29回福岡国際クロスカントリー大会】

日時：2015年2月21日(土) 競技開始時刻11時

会場：福岡県・福岡市

「国営海の中道海浜公園クロスカントリーコース」

種目：シニアの部 男子10km・女子6km
ジュニアの部 男子8km・男子4km・女子6km・女子4km
中学の部 男子4人×2km・女子3人×2km

※福岡国際クロスカントリー大会は、エントリーを受け付けています。
詳細は、<http://www.jaaf.or.jp/taikai/1227/>にて。

草原の格闘技と言われるクロスカントリーの熱戦を是非会場でご覧ください。

◆◆マラソンに取り組む市民ランナーの安全10か条◆◆

全国各地でマラソン大会が開催され、マラソンシーズン真っ盛りを迎えておりますが、レース参加に当たっては、下記、「マラソンに取り組む市民ランナーの安全10か条」をよくお読みの上、ご参加ください。

1. 普段から十分な栄養と睡眠をとりましょう。
2. 喫煙習慣をやめましょう。
3. メディカルチェックを毎年受けましょう。
4. 生活習慣病がある方は、かかりつけ医とよく相談しましょう。
5. 計画的なトレーニングをしましょう。
6. 気温、湿度に適したウェアの着用と、適切な水分補給をしましょう。
7. 胸部不快感、胸痛、冷や汗、フラツキなどがあれば、すぐに走るのを中断しましょう。
8. 足、膝、腰などに痛みがあれば、早めに対応しましょう。
9. 完走する見通しや体調に不安があれば、やめる勇気を持ちましょう。
10. 心肺蘇生法を身につけましょう。

また、本連盟ウェブサイト・医事委員会のページに「市民マラソン・ロードレース申込み時健康チェックリスト」を掲載しています。

<http://www.jaaf.or.jp/medical/healthcheck20130411.pdf>

こちらもお読みの上、ご参加ください。



陸連時報編集委員

◇編集委員

横川 浩 (陸連会長)
三宅 勝次 (陸連副会長)
友永 義治 (陸連副会長)
尾縣 貢 (陸連専務理事)
原田 康弘 (陸連強化委員長)
風間 明 (陸連事務局長)
高橋 克実 (陸上競技マガジン編集長)

◇時報編集室責任者

大嶋 康弘

◇時報編集担当

繁田 進
石塚 浩
木越 清信
宮田 宏
本田香代子
森谷 真咲

陸連時報編集室

〒163-0717

東京都新宿区西新宿2-7-1

小田急第一生命ビル17階

公益財団法人日本陸上競技連盟 内

TEL 03-5321-6580

FAX 03-5321-6591

ウェブサイト <http://www.jaaf.or.jp/>

公式動画サイト <http://japanathletics.tv/>